
閉鎖空間

CC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉鎖空間

【Nコード】

N5467P

【作者名】

CC

【あらすじ】

愛だとか恋だとかに興味はない。彼女の事が気になるだけ……

…

今時人生ゲームって何だよ、と思いながらルーレットを回した。

カラカラと乾いた音を響かせながら回るルーレットを眺め、机を寄せ集めて催された”お楽しみ会”自体が、受験を目前に控えた高校生のある事とは思えないような気がした――まして。この”お楽しみ会”の名目が、一週間続いた補習の打ち上げだと言えば尚のことだろう。

「おい、そんなに勢いをつけて回したら中々止まんねーじゃねーか」と、正面に座る担任の溝端が咎めたが、今更手で止めるわけにもいかない。無言で睨み返すと、小さく舌打ちした溝端の横で。

「須賀くんはさっきエリートサラリーマンになったばかりだから

……」

言いながら、長い睫毛を伏せて盤を見詰める和泉が程なく水色の車を見つけて指差す。

「あ、もう直ぐ初の給料日みたいよ」

言って顔を上げた和泉と目が合うと、「ああ、そう」と返し、車を探すフリをして視線を逸らす。優等生の和泉は自分の復習にもなりますから、と言って一週間溝端の補助として補習に参加したのだった。

ルーレットが徐々に動きを鈍くしていく。

「オレなんてもう初任給貰いましたよ！」

と、横の方から嬉々とした長田の声が聞こえたが、期待した返事は返ってはこない。

和泉は黙ってルーレットを見詰めており、何人が挟んだ向こうに座っている長田を全く相手にしていなかった。

――もしも。

和泉が長田の想い人なんかでなくて。ただの一クラスメイトに過ぎなかったらこんなに彼女が気にならないで済んだのだろうか、と考えている。

幼馴染の長田は入学式当日から、一目惚れした和泉を異常とも思える執念を持って追い続けていた。

長い黒髪を天辺で一つに束ね、黒目がちな瞳を輝かせて新入生代表の挨拶をする和泉に、静かなどよめきが起こったのも事実で、一目惚れをしたのは長田だけではないだろう。けれど、和泉を追いかける長田の行動はそれこそ執拗で、だから本来は誰とでも分け隔てなく接する和泉から尽く邪険にされるわけだが、そんな風に和泉に熱を上げる長田とクラスも、部活も、学校の行き帰りも、生活の殆どが一緒だったので、”和泉さん”というの名前は否応無しにオレの耳に染み付いていった。傍らで長田が彼女の名を呼んで後を追うので、オレもそれに引き摺られるようにして自然と彼女を目で追うようになっていった。

「あ、止まった！えーと次は……」『奮発して恋人の誕生日にプレゼントを買う』

「だから『\$2000払う』、だって」と、言って和泉の白い掌が目の前に差し出される。

「ほら、さっさと払いなさいよ」と。言われて初めて、ぼうつとしていた自分に気がついた。

「恋人にプレゼントを催促してる彼女みてーだな」

「『高いプレゼントを買って私の誕生日を祝いなさい』って上から見下してるみたいでヤダねー」と続ける溝端を、和泉は玩具の紙幣を受け取りながら振り返り、

「あら、安月給の自分じゃ出来ないからって僻んでるだけなんじゃないの」と、さらりと返して微笑む。

「口惜しかったらたまには奮発して高級店のディナーでもご馳走

したらどう？いつでも御馳走になるけど？」

言って溝端を真っ直ぐに見詰める和泉に、いつもとは違った印象を受ける。皆と同じ制服に身を包みながらも、生徒ではなく先生に近いような——そう、オレたちと同じ”子供”ではなく、先生と同じ”大人”なのだと思死に背伸びしているような、そんな雰囲気を感じた。

そして。

そう感じているのは多分、皆も同じなのだろう。和泉の言葉を受けて盤をぼうつと見下ろしている溝端と、返事を待つ和泉を、ゲームをする手を止めて誰もがじっと見守っている。

「——あのなあ、何でオレがお前にご馳走しなきゃいけないんですか、そういう台詞はオレの彼女になってから言って下さい」

一瞬止まった空気の流れを溝端は冗談めかして押し出すと、何事も無かったかのようにルーレットを回した。オレのルーレットが回り過ぎだと言いたくせに、溝端のルーレットも同じような速さで回っている。

カラカラと音を立てたルーレットを見詰める。

「なら、オレが何かご馳走しますよ！」

と、言って手を上げた長田を和泉が振り返る。

「有難う、だが断る」

キレイに微笑みながら長田の誘いを拒んだ和泉を、側に座った溝端が横目で盗み見ている。

意味深な視線の下で。

もしかしたら互いの手を握り合っているのではないか、などと言う考えが不意に脳裏に浮かぶ。しかし、ゲームのために寄せ集められてぴつたりと敷き詰められた机たちのせいで、目を凝らしても腰から下を窺い知る事は不可能だった。

「6?——あ、やだ、『失業して無一文』だって」

いつの間にか止まっていたルーレットを和泉が追う。白い溝端の車を動かすと、机の上に投げ出してあった溝端の紙幣を奪ってニヤリ、と笑う。

「ゲームでもお金持ちには縁遠いのね」

和泉の言葉を受けてどつと笑いが起きた。溝端はちつと舌打ちをして忌々し気に和泉を横目で睨んでいたが——不意に。そんな二人が廊下の薄暗がりで身体を寄せ合って居たのを思い出す。

あれはまだ、三年になったばかりの頃だった。クラス担任となつた溝端との付き合いは始つたばかりだったが、和泉と溝端は前から知り合いだったかのように仲が良かった。その辺の事情を1年の時に長田から聞いたような気もしたが、興味が無かつたのであまり覚えていない。

「興味が無いってお前なあ……あーあ、やっぱりもてるヤツは違うよな、余裕だよなあ」

あの時、長田は心底面白くないとも言つ様にちえつとわざとらしく舌打ちして空を仰いだ。本当に興味が無かつたから情報が曖昧だが、多分、家が近所で幼馴染とか、多分そんな話だったと思う。

——その、二人が。

薄暗がり隠れるようにして身体を寄せあっているのを、偶然盗み見てしまった事があった。既に噂を耳にはしていたので、別段驚く事はなかった。

「ああ、そうか」

それくらいの認識だった。

和泉は女で、溝端はつい2、3年前に大学を出たばかりの独身男で。和泉がまだ女子高生だと言う点で非難されることもあるかもしれないが——遠くて、暗くて。はつきり見たわけではないが、溝端

に抱きしめられた和泉はただの”女”であり、先生と生徒という以外、何も変わらない”普通の恋愛”なのだった。

「次はワタシね」

言っただけでゆっくりと回されたルーレットが緩慢に回転している。自分の番だからなのだろう、いつにも増して目を輝かせてルーレットを見詰める和泉を、傍らで溝端が見ている。

——もしも。

クラスメイトの和泉を親友であり幼馴染の長田がなんとも想ってなどなくて。

クラスメイトの和泉が他の生徒と何ら変わらない、ただの女子高生で。もちろん、教師との間に恋愛感情など一切なくて、だから”女”の匂いなんかも微塵も感じさせなかったとしたら。

「あ！『結婚したい人ナンバーワン』に選ばれて賞金\$3000貰うだつて、やった！」

言っただけで嬉しそうに机の上に身を乗り出してコマを進める和泉が、不意に「あ！」と声を上げる。見ると、手元に置いておいた小さな棒状の”人間”のコマを机の下にバラバラと落としてしまったらしかった。慌てて机の下を覗く和泉が「あー」と、情けない声を上げる。そうしてチラリ、と机の下から顔を出すと、次の花沢にルーレットを回すように指示し、正面を見据える。

「ねえ、そっちからも拾ってくれない？ 須賀くんの方まで行っちゃったみたい」

「ごめん、と掌を合わせた和泉がそのまま再び机の下へと消える。『僕も探しますよ！』と、長田が声を上げたが、『アンタの方には行っていないから、つか行っても拾わないでいいから』と、和泉は

強く返して制した。

「——何色のヤツ？」

何本も突き出た机の脚と脚との間を潜るようにして頭を突っ込んだ。同様に机の下に潜り込んだ和泉の頭上から、「後で探せばいいだろー」と、溝端の声が聞こえる。

貧乏揺すりをしているのは多分気の短い長谷川で、その向こうでパンツが見えるのもお構い無しに足を組んでいるのは北村だろう。和泉の様子が気になって落ち着かないのは長田で、その隣で汚れた上履きを脱いで放り出しているのは渡辺だ。

「水色のが何本か」

言って返す和泉が床に目を凝らしている。アイツの足は臭いそうだな、などと見ている場合では無いことに気付いて、慌てて床に目を凝らした。

「あ、こっちに来てるな、やっぱり」

言って水色の小さな棒を拾い上げる。

「やっぱり？」

返して和泉がゆっくりと机の下を進んでくる。

「あ、ここにも」

言って水色の棒を拾い上げる和泉が目前に迫る。

「有難う」

言いながら顔を上げた和泉が差し出した掌を確認する事無く、一気に顔を寄せると微笑んだままの和泉の唇に自分のそれを押し付けた。

驚いて身を引いた和泉が机の脚に背中を打ってガタガタと音を立てる。

「大丈夫ですか、和泉さん！」

と、直ぐに顔を覗かせた長田に、

「あ、ぶつけたのはオレ」

と、咄嗟に返して苦笑いを浮かべた。

「なんだ、須賀っちかよ、驚かすな」

と。言って引っ込んだ長田を確認して耳を澄ませた。

じつと足を組んだままの溝端の声は聞こえないが、やがて、花沢のルーレットが止まったのか、「あ、お前も失業か？」と、からかうような溝端の声が静かに届く。

驚きに目を見張る和泉が、身体を強張らせたままじつとオレを見詰めている。

その、腕を掴んで。ぐい、と引き寄せてみたが和泉は微動だにしなかった。

「お前も金には縁が無さそうだなー」

言って笑う溝端の声を遠くに聞いている。木の板一枚程度で隔てられた空間は、そこだけ密室のように閉ざされている。

——もしも、クラスメイトの和泉が。

するり、と擦り抜けた和泉の細い腕の感触を掌に残しながら、思う。

——もしも、和泉が。

誰かの想い人なんかでなくて、他の誰かのものなんかでなくて、女の色気など微塵もさせない、ただのクラスメイトに過ぎなかったのなら——これ程。

寝ても覚めても君のことばかり、考えなくても済んだのだろうか。

(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5467p/>

閉鎖空間

2011年1月12日08時55分発行